

## 「世説新語」に於ける王羲之と王獻之について

塚 本 宏

### 一

「世説新語」は後漢末（三世紀末）から東晋末（五世紀初）の激動期に生きた知識人たちの言動の記録である。小話集の形式をとり、全体を上・中・下の三巻に別け、六朝時代南朝の宋（420～479）の劉義慶（403～444）が編した。小話集であるため小説のジャンルに古来から入れられている。この件に関しては隋書卷三十四、志第二十九、経籍三（子部小説類）の中に

世説八卷（宋臨川王劉義慶撰）

世説十卷（劉孝標注。梁有俗説一卷、亡）

とあり、その他に、燕丹子一卷、雜語五卷、郭子三卷、雜對三卷、要用語對四卷、文對三卷、瑣語一卷、笑林三卷、笑苑四卷、（中略）小説十卷、小説五卷（後略）などと並列されている。そして、この章のまとめとして

小説者、街説巷語之説也。傳載輿人之誦、詩美詢于芻蕘。古者聖人在上、史為書、瞽為詩、工誦箴諫、大夫規誨、士傳言而庶人謗。（以下略）

とあるように「世説新語」を小説のジャンルに入れられていることがわかる。これは各登場人物が個性豊かに描写され、ドラマの一場面ずつを現実の世界として見せられているようである。ということは「世説新語」（以下略して「世説」と称す）は単なる史料ではなく、

筆者の意図も加えられたフィクションと見られる。従つて小話であつても小説の中に入れられているのである。

また、当時、小話は大流行していた。貴族の間に氾ばれていた清談がそれである。清談と言へば「竹林の七賢」で代表されるが、老荘思想や仏教の教理、さらには道教の神髄までも持ち出して、最上段にかまえて形而上学的な問題を中心に論議に花を咲かせたのである。議論のための議論をして、この激しい激動の時代を乗り切つたのである。「世説」はこの議論や、その時の噂話を内容の特徴によつて整理したエピソード集である。

エピソードは三十六篇の内容に分類され、総数は一一三〇話から成っている。中でも最も多い篇は賞誉第八で、一五六話(全体の十三・八%)、つぎに言語第二で、一〇八話(全体の九・六%)、そしてつぎに文学第四の一〇四話(全体の九・二%)と続いている。逆に最も少ない篇は自新第十五で、二話のみを収めるだけである。また、登場人物の総数は、全篇で六一五名、うち言語第二に七五名、賞誉第八に六三名、そして文学第四に五四名となっている。数字の上で比較してみると、賞誉第八と言語第二はエピソード数と登場人物数は逆転している。これは賞誉第八のほうが一人で数話に登場している場合があると言える。また、登場人物の中で生没年の不明な者が多い。全体六一五名中、

○生没年の確認者 一五七名(二五・五%)

○生没年の不詳者 三五九名(五八・四%)

○生没片方の確認者 九九名(一六・一%)

という結果からは、「世説」の時代は混乱と不安に満ちた乱世であつたことが考えられる。しかし、この激動の時代を生き抜き、為政者として、有徳者として活躍した人物が目立つ数人を数字で見ると、エピソード総数一一三〇話中、最も多いのが謝安で、以下次の通り

一、謝安 (320～385) 一一五話(二〇・二%)

二、桓温 (312～373) 九四話(八・三%)

三、王導 (267～330) 八七話(七・七%)

四、劉惔 (???) 七六話(六・七%)

五、王亮 (289～340) 五九話(五・二%)

- 六、司馬昱 (320～372) 五八話 (五・一%)
- 七、王濛 (309～347) 五七話 (五・〇%)
- 八、殷浩 (?～356) 五〇話 (四・四%)
- 九、支遁 (314～366) 四九話 (四・三%)
- 十、王敦 (266～324) 四六話 (四・〇%)
- 十一、王羲之 (307～365) 四五話 (三・九%)

ということ、書聖と仰がれた王羲之は十一番目であり、予想外に多い。清談の中心として名高い竹林の七賢は王羲之よりも少ないということとは意外である。そして、王羲之の子である王獻之(344～386)は二八話とさらに少なくなる。

二

「世説」の全体構成の中に、王羲之と王獻之はどのような篇に、どのくらいの数が収まっているかを見ていくと次のような表になる。尚、篇名中で番号がないのは、王羲之、王獻之両者ともエピソードが載っていない篇で、それらは次表からは除いた。全体三十六篇中に十六篇には収載されていない。また、王羲之、王獻之欄の( )内数字は、各篇のエピソード番号である。

上			卷	篇名	エピソード数	王羲之	王獻之	登場人物数
			徳行第一		47話		(39)	46名
			言語第二		108	(62) (69) (70)	(86) (91)	75
			文学第四		104	(36)		54

下 卷						中 卷							
簡傲第二十四	賢媛第十九	棲逸第十八	傷逝第十七	企羨第十六	容止第十四	規箴第十	品藻第九		賞譽第八			雅量第六	方正第五
17	32	17	19	6	39	27	88		156			42	66
	(25) (26) (31)	( 6 )		( 3 )	(24) (26) (30)	(20)	(62) (28) (75) (29) (85) (30) (47) (55)	(141) (92) (55) (96) (72) (100) (77) (108) (80) (120) (88)	(19)	(25) (61)			
(15) (17)			(14) (15) (16)				(80) (70) (82) (74) (86) (75) (87) (77) (79)	(145) (146) (148) (151)	(36) (37)	(59) (62)			
12	25	17	18	5	29	24	47		63			35	52

合計	下 卷					
	仇隙第三十六	忿狷第三十一	汰侈第三十	仮譌第二十七	輕詆第二十六	排調第二十五
20 篇						
908 話	8	8	12	14	33	65
45 話	(5)	(2)	(12)	(7)	(5) (8) (19) (20)	(54) (63)
28 話		(6)				(50) (60)
延 610 名	9	8	6	11	26	48

エピソードの合計は王羲之が四十五話、王獻之が二十八話となっているが、この数がすべて羲之、獻之が主役となっているとは限らない。脇役として、または単に比較の対象として名前が挙げられているにすぎない場合もある。主役として取り上げられているのは王羲之の場合は約三十話、王獻之の場合は約二十話であり、その他は脇役か、名前だけということになる。

登場人物の性格あるいは特徴ある内容によって、全体を三十六篇に分類された「世説」ということであるならば、王羲之、王獻之の父子は書道家としての世評をもっと全身に受けるようなエピソードはなかったであろうかという疑問が、この表の篇名を見て残る。というのは、篇名「術解第二十」と「巧芸第二十一」の両者には、芸術を意味するものが含まれているからである。絵画と同じように書道を芸術と位置付け、羲之、獻之父子を書道の達人と見るならば、この両篇の中で主役が無理ならば脇役としてか、あるいは噂話としてでも名前を連ねるべきではなかったかと考えられる。現代の我々が普通に考えれば、全く組み入れられてないということには納得

がいかない。それではここで使われている術解、巧芸とはどのような意味なのかを調べてみると、術解は「術をよく解した人」という意である。すなわちこの時代の「術」とは、楽律、天文曆数、占卜、医術、相馬、相宅などの技術のことである。そして、この篇はこれらの技術に精通し、自然の理法と人事の動向の解明にすぐれた技術と見識を発揮した名人のエピソードを中心としたものである。また巧芸は「芸に巧みな人」という意であり、「芸」とは書、画、彫刻、建築などの美術、及び彈棊、囲棊、博奕、騎射など、当時の貴族の文雅な趣味や遊戯を意味するものである。他の例を見ると、

顔氏家訓の雜芸には

書道、絵画、弓矢、卜筮、算術、医薬、琴瑟、博奕、囲棊、投壺、彈棊

芸文類聚第七十四巧芸部には

射、書、画、囲棊、彈棊、博、樗蒲、投壺、賽、蔽鉤、四維、象戲

「世説」の巧芸第二十一では、当時画聖と言われた顧愷之が主役である。その様子をのぞいてみると、

謝太傅(謝安)云う、「顧長康(顧愷之)の画は、蒼生有りてよりこのかた無き所なり」と。

と謝安が彼の画を絶賛している。また肖像画を描くとき、

顧長康人を画くに或いは数年まで目精を点せず。人其の故を問う。顧曰く「四体の妍蚩は、本妙処に関する無し。伝神写照、正に阿堵の中に在り」と。

と画に於ける制作理念を「伝神写照」と説いて、精神性に重点を置いている。そしてさらにこの篇の最後に自分の絵画論を展開し、自分の画について

顧長康画を道う、「手五絃を揮う」は易く、「目帰鴻を送る」は難し」と。

と嵇康の詩の一節である「手は五絃の琴をつまびき」は、具体的な形として画に描きやすいが、やはり同じ詩の「目は帰鴻を送る」という抽象的概念に近い事柄は、画にすることは難しいと顧愷之は述べている。

そして、この一節をもつてこの巧芸第二十一の最後としているのである。この三話を熟読してみると、画聖顧愷之の画に対する考え方なり、画境の一端なりがうかがえるのである。従って本来ならば後世書聖と仰がれた王羲之と並べ称されるべきであるのに、何も触

れられていないという事に疑問が残る。巧芸の中では書道については、「韋仲将（韋誕）書を能くす……」「羊長和（羊忱）博学にして書に工みなり……」の二話が取り上げられているにすぎない。

### 三

王羲之は德行第一には姿を見せない。どのような理由からかはわからない。しかし、王獻之は一話に姿を見せている。德行第一は原則的には儒家的価値観に基づいた有徳者の言動に関することが選ばれているからであろうか。論語の先進篇に

子曰、從我於陳蔡者、皆不及門也。德行顏淵、閔子騫、冉伯牛、仲弓。言語宰我、子貢。政事冉有、秀路。文学子游、子夏。

とあり、德行第一、言語第二、政事第三、文学第四の各名称はこの孔子が言っている孔門の四科から採用してある。羲之が入っていないのは偶々内容的に収載されるべきエピソードが見つからなかったというにすぎない。

言語第二には三話に登場する。本篇は当時の知識人の機智に富んだ会話や、広くて深い教養や知識の中からなげなく発せられたセンスのよい言葉にかかわるエピソードが収められている。「言語」について大矢根文次郎博士は、その著書「世説新語と六朝文学」の中で、

説文では「直言を言といい、論難を語と曰ふ」といっているし、また「語は論なり」といい、段注では「語とは禦なり。毛説の如きは、一人是非を弁論する、これを語と謂ひ、鄭説の如きは、人と相問答弁難する、これを語といふ」とある。「思った通りに言うのが直言で、不正や誤りを取り上げて互いに非難攻撃することが論難である」というのが説文の義である。（中略）

今様にいえば、音声や文字で互いに思想、感情、意志を表現し、相手と伝達しあう活動が言語ということになる。

と説明されている。さて、羲之の三話についてであるが、まとめると、(1) 親友謝安との対話 (2) 劉惔と許詢の生活保証についての対話を傾聴し、それについての羲之の意見 (3) 世俗を超越した志を謝安と歴史談でやりあうものを内容としている。謝安とはいっても同等の気持で語り会うというよりはどこか羲之が一步譲っていて、謝安をたてている。羲之の謙虚な態度が美しく表されている。例えば謝安が羲之に、

「中年にして哀楽に傷み、親友と別るれば、すなわち数日の悪を作す」

と話しかけると義之は同感の意志表示をして、

「正に糸竹に頼りて陶写するも、恒に児輩の覚りて、欣楽の趣を損せんことを恐る」

と具体的に、しかも謝安の氣持を慰めるように心暖かく応えている。

また、清談の名手であり、丹陽郡(江蘇省)の長官である劉惔と、清談に秀れていたが夭折した許詢との現実の生活保証に関する対話に対し義之は、

「もし巢父や許由(巢父と許由ともに堯が天下を譲ろうとしたが辞退し、けがらわしいことを聞いたとして恥じた)が稷(周の祖の后稷)や契(殷の祖の契)に会ったとすれば、こんな下世話な話はしないだろうよ」

と古代の話を持ち掛けると二人とも顔をあからめて恥じたとある。よくつかう論理であるが、実に冴えた内容である。

謝安とは親友であった義之はあるとき二人で冶城に登って話し合った。夏の禹王も周の文王もそれぞれ非常事態に対してそれぞれの手を打ったのに、今日、その職務を怠って空虚な議論にふけていては時宜に叶わないのではないかと義之がぶつけると、謝安は世俗を超越した志をもって手短かにたしなめている。

「秦はあの切れ者の宰相である商鞅を登用したが、わずか二代で亡んでしまった。清談などがどうしてわざわざいを招くものか」

と、さらにスケール大きく返答している。劉惔と許詢の上に義之、そしてさらに上に謝安が居るという器の大きさの違いを知らされる。以上が言語第二の三話である。

文学第四の唯一のエピソードは王羲之が会稽郡内史となつて赴任しているときのことであり、同じ会稽の余抗山に隠棲し、二十五歳で出家したという支遁との出会いを扱ったものである。一徹な自負心をもっていた義之を、孫綽が中をとりもつて二人を会わそうと試みた。はじめはかたくなに心を閉ざして言葉を交わそうとしなかった。義之はもともと支遁を軽蔑していた。そして、その後、義之が丁度外出しようとしているところに支遁が尋ね、語りかけた。

「君いまだ去る可からず、貧道(拙僧)君とすこしく語らん」

と、ぐっと近寄つた。そして莊子の「逍遙遊篇」を論じ、しゃべりにしゃべつて、その縦横無尽の才氣は新鮮で百花咲き乱れる趣きがあったと言われる。それを聞かされた義之はやがて外出用の服を脱ぎ、いつまでも聴き入っていたということである。



漢王朝は儒学一色に塗られていた。その流れを受け東晋に生きた義之の思想的バックは、やはり儒学であった。しかし、政治的な混乱の中に清談が盛んになり、老莊の学が論じられ、さらに仏教や道教の浸透もあって、当時としてはこれらは清新の気そのものであった。義之はこの支遁との出会いによって思想的に一步成長させられたということになる。

方正第五には二つのエピソードがある。東晋の中書令であり、尚書右僕射であった諸葛恢の娘は、礼になかった教えを身につけていて、態度はきちんときき届き、容貌は光り輝いていたという。しかも父の諸葛恢の亡きあと結婚し、花嫁としても素晴しかった。その花嫁を義之が見て感嘆して言った。

「我在りて女をやるも、わずかに爾を得るのみ」

と、即ち、生きているうちに娘を嫁に出したとしても、あのくらいにしつけられるのがやっとならうと嘆じて言ったのである。

また、謝安と義之の二人で、東陽太守であった阮裕をたずねた。門の所まで来ると謝安に言った。

「もとよりまさに共に主人を推すべし」

と、阮裕を何かのポストに推挙すべく二人で訪問したと思っていたら謝安は

「人を推すことは正に自ずから難し」

と、これは短い二人のやりとりである。一体何をどのように解すべきなのか、謝安にはもっと他に深い考えが阮裕に対してあったのか、阮裕の実力を認めるべきものがなかったのか、それとも、たとえあるポストに推挙しても辞退されることを知っていたからかなどの疑問はのこるが、謝安の人間に対する用意周到さに義之も教えられるものを感じているのであろうか。漢代以来、官吏を推挙する場合の条件の一つに「賢良方正」がある。即ち、行いにかどめがあり、礼になつていて正しいということであるが、謝安の阮裕に対する方正は、実は「正に自ずから難し」という回答となったのであろう。

雅量第六の唯一の話は、義之が郗鑒の娘を嫁に決めるときの、正に現代的な感覚を思わせるような内容である。郗鑒が書生に手紙を持たせて王導に届け、自分の娘の婿を探してほしいと頼んだ。王導は郗鑒の使者に言った。

「きみ、東の離れに行つて勝手に選びなさい。」

書生はもどつてくると、郗鑒に申し上げた。「王家の皆さんはご立派ですが、婿選びに來たと言うと、それぞれよく見せようとかつこ

うをつけた。しかし、ただ一人だけが東側のベッドに腹ばいになったままで、何も耳に入らぬようでした。」  
都鑒はそれを聞いて言った。

「それがいい。」

問い合わせてみると、その男こそ義之であつた。そこで娘を彼に嫁がせた。

とある。都鑒の器量の大きさ、一決する時にピンとくるものがあつたのであろう。「みな自ら矜持す」とは、「かつこうをつけること」であるが、ベッドに臥していた義之は、実は最もかつこうつけていたのかもしれない。義之自身はこのようにして自分の嫁を決めたというよりは決めさせられたということであうか。

賞普第八には最も多く登場し、義之の名前だけでも十一話に出てくる。全体が一五六話であるから七パーセントとなる。またこの賞普第八は他の篇よりも群を抜いて多く、全体の約一四パーセントを占め、人物批評がこの時代に流行したことを示している。

大將軍であつた王敦は義之にむかつて、

「汝は是れ我が佳き子弟なり、まさに阮主簿（阮裕）に減ぜざるべし」

と語り、阮裕と比較して義之にハッパをかけている。若くして徳行のあつた阮裕は、時の大將軍王敦に招かれ主簿となつたが、主人の王敦に反乱の意があるのを察知して、彼は酒にひたり職務を怠つたということである。そのために王敦の目には「減ぜざるべし」と写つたのであろう。

また、中書令として王導と共に成帝を補佐し、朝廷の実権を握り、蘇峻の反乱の責任をとつて予州刺史となつた庾亮は義之を評して、

「逸少（羲之）は国挙なり」と。

故に庾侃（庾亮の甥）碑文を為りて言う、

「拔萃国挙」と。

とある。即ち、国家的人材として碑文に誌すというのであるから義之にとっては一大事であり、名譽なことである。

また、東晋の中軍將軍、揚州刺史であつた殷浩は、征西大將軍、大司馬の桓温に憎まれて官位を奪われ、老莊の学を好み、清談に長じていた。その殷浩が義之を評して、

「逸少は清貴の人なり。吾これに於いて甚だ至り、一時に後るる所無し」と。

とある。「清貴の人」とは最高級の形容である。また殷浩は「清鑒貴要なり」と、評している。

阮光祿（阮裕）言う、

「王家に三年少有り、右軍、安期、長予」と。

王家の三人の目立った若者の中に羲之が入っている。安期（王廙）は王敦の養子となり、王敦の武衛將軍となつたが、王敦の反乱の際に殺された。長予（王悦）は王導の長子で東晋の中書侍郎、排調第二十五に「長予幼にして和令なり。王導愛恣甚だ篤く、毎に共に困某す。……」とあり、王導の目の中に入れても痛くなく、溺愛していた。

羲之は「（阮裕に）減ぜざるべし」「国挙なり」「清貴の人なり」そして王家の三人の若者の一人と挙げられている。

次に、羲之自身が他の人をどのように評しているかを賞誉第八の中で見ると、謝安の弟の謝万には、

「林沢の中に在りて、自ずから遡上を為す。」と。

支遁には感嘆して、「器明神儻なり」と。

平西將軍の祖約には、

「風領毛骨、恐らくは世を没するまでまた此の如きの人を見ざらん」と。

劉惔には、

「雲柯を標するも扶疎せず」と。

魏の征西將軍陳泰には、

「墨塊として正骨あり」と。

東晋の東陽太守である王臨之には、

「我が家の阿林は、章清はなはだ出ず」と。

と、謝万・支遁・祖約・劉惔・陳泰・王臨之の人物批評をしている。また、劉惔との対話の中で、謝安について、

「もとより、まさに共に安石（謝安）を推すべし」と、

劉尹(劉惔)曰く、

「もし安石の東山の志立たば、まさに天下と共にこれを推すべし」と。

即ち、謝安の東山に隱棲しようという志が確立しているのなら、天下の人びとと一緒に彼を推薦し、天下をまかせるに十分であろうと誉めつつ評している。また、支遁との対話で

「長史(王濛)は数百語を作すも、德音に非ざるは無し。苦しめざるを恨むが如し」と。

王(羲之)曰く、

「長史は自ずから物を苦しめんことを欲せず」と。

と、羲之のおだやかな性格が清談の大家である王濛を巧みに表現し、評している。

品藻第九も前篇と同様に人物批評に関する話題を集めたもので、特に比較論評が多い。例えば、羲之が若いころ王導が言うには、

「逸少は何によりてまた万安(劉綏)に減ぜんや」と。

と、王導は劉綏と比較して「減ぜんや、否決して減ずることはない」と羲之を賞めている。そして、劉綏を庾亮が絶讃して「光り輝く玉の如く抜きんでた者」とか「千人の中においても目立ち、百人の中においても目立つ」と最高級の誉め言葉を使っている。ということは王導の目にもこのような劉綏の輝きはうつっているであろうし、羲之と比較して「減ぜんや」であるから、若いころはほとんど同等という見方をしているのであろう。

当時の人々が東陽太守である阮裕を評して、「骨気は右軍(羲之)に及ばず。簡秀は真長(劉惔)に如かず。韶潤(うるおいのある美しさ)は仲祖(王濛)に如かず。思致(思慮の深さ)は淵源(殷浩)に如かず。而も諸人の美を兼有す」と。

と、阮裕は骨つばさでは王濛之に及ばないと比較している。

また、呉興太守であった王胡之が王濛にたずねて「王羲之と王述と比べてどうか」ときいている。そして、王濛が答えないうちに王胡之は「王羲之は評判が高い」と言った。すると王濛は「王述も高くないわけではない」と評している。王胡之と王羲之は琅邪(山東省)出身、王濛と王述は太原(山西省)出身という同郷のよしみでこのような会話が生まれたのであろう。質問を発した王胡之が、返事を待たずに機先を制して自分が言いたいことを先に言うということは礼に反する。しかし、とにかく羲之の評判に関して王濛に言いたかつ

たのである。

また、郗鑒の孫の郗超（郗愔の子）が、謝安を評して言った。「にじり寄って膝をつき合わせ、深く核心を貫くというわけではないが、ねばり強くまといついてくる。」と、またある人が言うには、「羲之は本質に触れている」、郗超はこれを耳にすると「本質に触れているとは言えまい。まあせいぜい謝安と同格といったところだ」と、謝安は郗超の言葉は当たっていると思った、とある。郗超の謝安に対する感情が厳しく出ているが、謝安はまた気持を大きく、よく郗超の言を耳すまして聞いている。

羲之の七番目の子に王獻之が居た。父親ゆずりで書の達人であった。後世の人々は羲之を大王、獻之を小王と称し、二人あわせて二王と言った。この二人を比較して、謝安が獻之にたずねた。「あなたの書は、お宅のお父上に比べていかがですか。」獻之が答えて「当然同じではないです」と言った。謝安は「世間の人々の評判はまったくちがうようだが。」獻之はそれに答えて「世間の人たちにどうしてわかりましょか。」といった。書聖と仰がれた父の羲之の陰にいつもあつた息子の獻之に対して、世間は味方したのであるか。書の技術面に於いても秀れていた獻之は、父親と違う書の雰囲気を作り出したことは確かである。獻之自身はある程度心の中で思っていたことはあつたかもしれないが、謝安の前では特に品行方正だったのである。それにしても獻之が答えた「固より当に同じからざるべし」とは、一体何を彼はその裏で言いたかつたのであろうか。父の書は父の書、自分の書はあくまでも自分の書であつて、同じでないのは当然なのだと思つて言つたのであろうか。そして、謝安の鋭い二発目の質問の「世間の評判は……」ということは羲之の書に獻之の書は追従しているという意味での問いであつたから、獻之は「外人（世間の人）なんぞ知るを得ん」と少々憤慨した口調で言っている所に、獻之らしい人柄が出ている。彼の性格についての詳略は、後の章で扱うこととする。

また、次のように王恭が謝安にたずねた。「支遁は羲之に比べていかがでしょうか。」と、謝安が答えて言うには「羲之の方が支遁よりすぐれている。だがその支遁も王胡之の前に出ればこの上なく気品がある」と。なるほど比較する相手によつてその人間の利点も欠点も違つて見えてくるという例であろう。人間の気品などは特に相手次第ということであろうか。次に、羲之自身が他の人をどのように比較して評しているかを同じ品藻第九の中で拾ってみると、例えば、北方出身の下僕とその主人の郗愔と比べてどうかと劉惔が羲之にたずねた。これは羲之が気の利く下僕を見て誉めたからである。羲之が言うには「その下僕はしよせん下賤な身でちよつと気が利いているというだけだ。どうして軽々しく主人の郗愔と比べることができようか。」と、それに対して劉惔は「主人に及ばないとすれば、

やはり平凡な下僕というところだ」と言った。これは義之の無難な応答の仕方であり、誰にも傷はついていない。比較するものの対象をはつきりとさせている義之の明確な応え方は、これ以上追求しようという気持は起らない。また、義之が許詢にたずねて「君は自分で謝安と比べてどう思うか。」すると、許詢が答えないので、義之が「謝安ならもちろん君と肩を並べる俊雄だ。弟の謝万だったらきつとまなじりを決してきみを押しつけようとするだろうがね」と言った。

規箴第十で義之に関するエピソードは一話しかない。ということは義之はあまりあやまちとか、まちがいはなかった人間ということが言えるのであろう。その一話は、義之は王脩と許詢の二人とも仲がよかった。ところが二人が亡くなると、義之の彼ら二人についての論じ方が以前よりきびしくなった。それについて丹陽尹で呉興太子の孔巖が戒めて言うには「あなたは以前、王脩、許詢と親しくつきあっていたのに二人が亡くなってからというもの、死者に哀悼の情を尽くす心が感じられないのはわたくしには感心できないことです。」と、それを聞いた義之は大いに恥じたとある。どのような事情であつたかわからない面はあるが、「右軍甚だ愧ず」と最後の一言は人道上実に重要なことである。現実的にはきつと義之は多忙の為に気がまわらなかったのであらう。しかし、忠告を受けて「ハッ!!」と気がついて「甚だ愧ず」ということはさすが義之の人柄といつてよいであらう。

容止第十四には三話が見られる。第一話は庾亮の無礼な態度を王導が「いささか無礼講にならざるをえなかったのだらう。」とうながすと、義之はこれに応えて「庾亮の胸中にはただ山水しかなかったのです」と、優等生的にその夜の秋の雰囲気をこわさないように返している。第二話は義之は杜乂を見て感嘆して「顔は凝脂のよう、眼は漆を点じたようにパツチリしていて、これは神仙界の人だ」と言っている。礼儀にかなった行動、あるいは容貌や風采について述べたのがこの容止第十四であるが、第三話はごく短く、義之自身に對しての評が入っている。

時人王右軍を目す、「飄として遊雲の如く、矯として驚龍の若し」と。

と時人、即ち当時の人が評している。「遊雲驚龍」の四字句はここから生まれている。また晋書には

論者稱其筆勢、以為飄若浮雲、矯若驚龍。

とあり、これは義之の「筆勢」について述べている。人間を評した言葉が後になって書評と変わったと解してもよいであらう。「遊雲」が「浮雲」になつてはいるが、言わんとしている内容は同じことである。正に「書は人なり」であり、「人は書なり」即ち「人物評は書

評なり」ということである。

企羨第十六には全体で六話が収められているが、義之に関しては一話である。「企」とは「つまさき立つ」意であり、「羨」は「うらやむ」意である。「企羨」とはつまり「つまさき立つような思いで、人が立派であることを羨望する」意味である。

王右軍人の蘭亭集の序を以て金谷詩の序にくらべ、又己を以て石崇に敵せしむるを得て、甚だ欣ぶ色有り。

蘭亭序と金谷詩序とが肩を並べて扱われていることに義之がこの上なく悦んでいる様子が記されている。「金谷詩序」とは西晋の石崇が洛陽東北郊にあつた別荘金谷園に客を集めて宴を開き、その席で作られた詩集に石崇自身が書いた序文である。正に蘭亭序と似た思考のもとに作られた序文というよりは、蘭亭序が逆に真似たのである。品藻第九の中に「金谷園」の宴について、

謝公（謝安）云う、「金谷中蘇紹最も勝る」と。蘇紹は是れ石崇の姉の夫、蘇則の孫、蘇愉の子なり。

と、その宴で最も秀れていた者が蘇紹だったということである。

棲逸第十八には一話に義之は登場する。

阮裕東山（会稽）に在りしとき、肅然として事無く、常に内懷に足る。人有り、以て王右軍に問う。右軍曰く、「此の君、寵辱に驚かざるに近し。古の沈冥と雖も、何ぞ以て此に過ぎんや」と。

とある。「沈冥」とはひっそりとひそんでいることであり、隠れて跡をのこさぬさまである。「棲逸」は世俗から逃れて悠々自適の生活を送ることである。阮裕が理想的な形で棲逸していることについて義之は心をこめて自然に説明している。自分も将来はこの阮裕のような心境でということである。

賢媛第十九には三話に登場する。「賢媛」とは「賢明な婦人」という意であり、男まさりの才気があり、地位も学問もある女性についての具体的なエピソードを集めた篇であり、当時の女性観を知る上で興味のある篇でもある。まず、義之の都夫人であるが「都夫人は二人の弟である都悋と都曇に言った。王家では謝家の二人が見えると、上を下への大騒ぎで迎えるのに、あちらではお前たちが訪ねてもどこ吹く風という感じだ。もう王家などへわざわざ出かけることはないよ。」と、また、義之の息子の王凝之の妻の謝夫人は王家に嫁いだから夫を軽んじ、謝家に里帰りしても不満げであつたので、叔父の謝安がなだめた。「王凝之は王義之の息子で人柄は悪くはない。お前は どうしてそんなに不満なのか。」すると答えて、「私の一門は叔父もいとこたちも秀れているのに、この天地の間に王凝之のよう

なくだらぬ人がいようとは思つてもみませんでした。」と夫婦喧嘩を日常茶飯事としているような夫婦も当時は少なくなかったようである。また、王恵(王導の孫)が羲之夫人にたずねた。「耳目はまだ不自由を感じませんか。」と、夫人はこれに答えて「髪白く、齒は抜けてもそれらは肉体に関することです。眼耳については精神に関することですから人と違つては困ります。」と高齢にかかわらず精神力は強かつたようである。

輕詆第二十六には四話ある。「輕」は「輕んずる」意、「詆」は「そしる」意である。従つて「輕詆」は「相手を輕蔑してこきおろす」ということで、手厳しく、痛烈なエピソードが多い。羲之は若い頃は口が重かつた。あるとき大將軍の王敦の所に居ると、王導と庾亮がやつてきた。羲之はいきなり立ち上がつて出てゆこうとしたら王敦はそれを引き留めて言つた。「あなたの所の王導じゃないか。庾亮だつてしりごみすることはない。」と。しかし、「庾亮は名士だと世間の人はいうが、彼の胸の中にはいばらのとげが三斗もつまつていゝ」とか「權力が強く、王導を圧倒するほどの勢い」とかを耳にしていたので、羲之は庾亮を警戒して席を立つたのである。

また、羲之が江州刺史で南に赴任していたときに王導が手紙を彼に送つて、いつも息子や甥のできがよいことを嘆いて言つた。「王彭子も王彪之も似たりよつたりでできがよい」と。二人は王導の従弟王彬の子で、兄弟である。

また、謝万(謝安の弟)が寿春(安徽省)で敗れた後、羲之に「かねてからの期待に背き面目ございません。」と手紙を書いた。羲之はその手紙を押しやつて言つた。「これこそ禹・湯の戒めだ。」と。これは謝万に対して厳しく言いたかつたのであろう。夏の禹王も殷の湯王も有徳者である上に、さらに自己に厳しくしたために、国を興すことができたのである。謝万は部下の信頼を失い、軍の規律を乱して敗れたので、今さら自分をとがめても救いようがないと強く言いたかつたのである。

羲之の名笛を孫綽の妓女が折つてしまった。魏の三祖伝来の由緒ある楽器を、孫綽の所の小僧がへし折つたと言つて羲之が激怒したというのである。三祖とは魏の武帝、文帝、明帝の三代である。妓女が振り回したあげくに折つてしまったのであるから、この不心得者めがと怒り狂うのも当然である。

仮譎第二十七には羲之が十歳のとき、伯父の大將軍王敦の帳中で、王敦の鎧曹參軍であつた錢鳳との反逆の陰謀の話しあいをしてしまい、殺されるかと思つたが機転を利かして無事に助かつた話がある。もしこの二人の密談が羲之に聞かれたら大変、「之を除かざるを得ず」ということで帳をあけてみると、帳中吐きちらして、あたかも熟睡しているかの如く二人に信じこませ助かつたのである。そ



の後、世の人々は義之のこの機智をほめたたえたとある。乱世によくある場面である。

汰修第三十には前述の如く、若い頃（十三歳と言われる）、周顒の宴会の末席に居たが、牛の心臓を切り取って食べさせられた。当時、これは貴重なもので普通ではほとんど口に入らなかった。これで義之は見なおされたというエピソードがある。

忿狷第三十一には義之の笑いが登場するが決して快活な笑いではない。驃騎將軍であつた王述とのエピソードで、王述はせっかちな男だつた。卵を食べようとして箸で突き刺そうとしたがうまくいかない。そのとき大いに怒りその卵をつまみあげて地面に投げつけたら、ころころ転がって止まらない。さらに地に下りた彼は下駄の歯で踏みつぶそうとしたがそれもうまくいかない。ますます怒り狂つて今度は地面から卵を拾い上げて口の中に入れ、かみくだいてから吐き出した。義之はこれを聞いて大笑いして言つた。「王述の父上の王承のように立派な人だつて、もしもこのような性格があつたら一豪すら論ずべきこともない。ましてや息子の王述ごときは……」と、義之とすれば余計なことを言い過ぎてしまった。最後の「況んや藍田（王述）をや」がさらに王述を怒らせたことであろう。言つて良いことと悪いことがある。この一言が将来、義之にどのような形で返えされるのか、この時は知るすべもない。日頃の言動は厳に慎まなくてはならない。

そして、最後の仇隙第三十六には義之の暗黒が書かれている。「仇隙」とは「敵視して反目すること」である。義之は前述の卵の一件も含めて、王述とは不仲であり、軽蔑もしていた。しかし、王述は晩年だんだんと評判が上がり、義之の心中は穏やかでなかつた。王述は会稽で親の死にあい、葬儀を営み、義之が代わつて会稽太守となつた。義之は弔問に行かなければとたびたび言いながら、いく日たつても果さず、その後王述の家に行き取りつぎを請うた。王述は霊前で哭礼したが義之は中に入らずに帰つてしまい、王述に恥をかかせた。かくして二人の間の溝は大きなものとなつてしまった。

その後、王述は揚州刺史に任ぜられたが、義之は依然として会稽郡の太守のままであつた。義之の考えでは、会稽郡を揚州から分離して、越州として独立させてほしいと一人の参軍を朝廷に遣わし願ひ出していた。しかし、義之の構想通りにはならず、逆に当時の名士の笑ひ者にされた。王述は着々と裏で義之の郡政の不正の情報を集め、前から不仲であつたことも理由に、義之にみずから進退を適宜にさせるようにしむけた。義之はやがて病氣だといつわつて会稽郡の太守を辞任し、その後、悶々のうちに死ぬこととなつたのである。この死は、義之の政治家としてのいかにも淋しく、哀感極まるものであるが、書聖としての理想化した見方からは予想もつかない感じ

はする。

#### 四

王獻之(344～386)は、先ず、徳行第一に登場する。この篇は儒学的価値観に基づいた「徳行」に関するエピソードが多く集められているのであろうが、はたして獻之のこの話題はどの点で徳行なのか疑問がのこる。というのはある時、獻之が危篤状態であった。道教の信者はそのしきたりとして天帝を祭り、過去に犯した罪を懺悔して許しを請わなければならなかったので、獻之に尋ねた。

「由来、何の異同得失有りや」と。

獻之がこれに答えて、

「余事有るを覚えす。唯だ郗家と離婚せしを憶うのみ」と。

と心中にあることを述べた。郗曇の女との離婚のことである。

王羲之の書翰集として名高い「十七帖」には、

自分には七男一女があつて、既に皆結婚したが只一人末の獻之だけが未婚者である。これに妻を迎えれば私も安心して彼の蜀の地に遊ぶことができると思う。今、内外の孫は合計十六人で、膝にめぐらせて楽しむことができる。

と、父親として未婚の獻之のことを思う気持ちがよく表現されている。確かにいつまでも一人でいることが気になっていたのであるが、その獻之がやつと結婚したと思つたら後に離婚するのであるから、親不幸と思われたことであろう。道家が上章してくれたことに対し獻之は素直に心を打ちあけたという所が、この篇に存在する理由であろうか。

言語第二には二話に登場する。獻之が鎮北將軍の王恭に語るに

「羊叔子自ずから復た佳なるのみ。然れども亦た何ぞ人事に与からん。故より銅雀台上の妓に如かず」と。

と、大胆不敵な言い方をしている。銅雀台とは魏の武帝曹操が鄴に築いた台で、この台の上で曹操は盛大に女樂を催したと言われる。また、獻之が山陰道を歩いたときのことが収められている。

「山川自ずから相映発し、人をして応接に暇あらざらしむ。秋冬の際の若きは、尤も懷を為し難し」と。

とあるが、山水の美しさはまるで応接に暇がない程であるということである。人事など忘れて自然の美しさにひたっている獻之の心のゆとりは素晴らしいことである。

方正第五には二話がある。獻之がまだ五、六歳の頃、書生たちがばくちをしているのを見ていたが、勝負がついたと思って言った。

「南風競わず」と。

書生連中は獻之のことを子供だとたかをくくって言った。

「此郎もまた管中より豹を窺い、時に一斑を見るのみ」と。

子敬（獻之）目を怒らせて曰く、

「遠くは荀奉倩に慙じ、近くは劉真長に愧ず」と。遂に衣を払い去る。

とある。彼の鬼才ぶりを発揮した一場面である。ばくちをしていた書生たちはさぞびっくりしたであろうが、毅然とした獻之の態度はまた実に立派である。

また、謝安とのやりとりに次のような楽しい会話がある。これもまた獻之の大胆さが出ている。太極殿が落成したころ謝安は題額用の板を獻之の所に届けて、題額を書かせようとした。獻之は面白くなさそうに使者に言った。「門外にうっちゃっておけ」と。その後謝安は獻之に会って「題額を書いて奉納したらどうだ。昔、魏の韋誕だって自分で書いたのだから。」と。すると彼が言うには「自分で書いたから魏の命は長つづきしなかった原因です。」と、謝安はこれは名言だと思った。と、実はつきりとした、合理的な問答というか、方正篇にふさわしい話題である。

雅量第六にも二話入っている。王徽之との人物比較のようなエピソードである。徽之と獻之が同じ部屋に座っていたら突然奥の方から出火した。徽之はあわてて逃げ、下駄をはくひまもなかった。一方、獻之は平然とした顔で、おもむろに左右の者を呼び、平生と変わりなくかいぞえをさせて外へ出たという。世間の人はこのことで王家の二兄弟の器の大きさを判定した、とある。獻之の人物がだんだんと見えてくるようである。

また、苻堅が国境に出没していたので、謝安が獻之に言った。「ひとつ乗り出して、あいつをこのへんでかたづけてやるか」というのであるが、獻之は何も応えていないのでその言わんとしている意味がつかみにくい。苻堅とは氏族の出身で、当時華北全域を治めてい

て、南進したが東晋軍に敗れたということである。

賞賛第八には四話入っているが直接関係があるのは二話である。まず、獻之が謝安に語った。「あなたはほんとうにサツパリした方ですね。」と、謝安がそれに答えて「サツパリなどしておらぬが、私に対する批評としては最も上手に言い得ている。ほんとうはのんびり屋なのだ」と。彼は大先輩に対して思いきったことが言える男なのであろう。

また、兄の王徽之に手紙を書いて「兄上はしよぼしよぼしてつまらなさそうだが、酒を飲むとすつかりいい気持になって帰るのも忘れてしまふ。それはそれなりに素晴らしい」とまた思った通りのことを気持よく言つてのける。これが獻之のスパツとしたよい人柄なのであろう。

品藻第九には九話入っているがその中から三話について触れてみると、謝安を王家三兄弟が訪ねた。王徽之と王操之はしきりに世間話をしていたが、獻之は時候の挨拶をしただけだった。彼ら三人が退出してから、そこに居あわせた客が謝安にたずねた。「今の三人の中で、誰がいちばん秀れていますか」と、謝安が答えて、「小さい獻之が立派です」と。客がその理由を聞くと、謝安は「吉人の辞は寡なく、躁人の辞は多し」と答えた。獻之自身もこの言を知つてのことかはわからないが、「多言しばしば窮す」という老子の言がある。また、ある人が謝安にたずねた。「王獻之は先輩の誰に比べたらよいか」と。謝安は「獻之は王濛・劉惔の高い梢に手が届いていると言える」と言っている。これは獻之を大いに賞めているととらえてもよいのであろう。

また、王徽之と獻之の兄弟が嵇康の著書である「高士伝」中の人物と賛を鑑賞した。獻之は後漢の学者として有名な井丹の高潔さをほめたたえたところ、徽之は前漢の文人である司馬相如が世間を見下した傲慢さには及ばないと力説した、とある。同じものを鑑賞して二人の性格の違いがよく表われている。

傷逝第十七には三話に登場する。獻之は羊綏と仲がよかった。羊綏は純粹で誠実、質朴で気品があったが、中書郎となり若くして亡くなった。獻之は心の底から悲しみ王珣に言った。「羊綏こそ国家のために惜しむべき人材だった」と。

また、王珣と謝安は仲が悪かった。謝安の訃報を聞いて王珣は獻之を訪ねた。獻之は床にいたばかりだったが、王珣の弔問の意を聞くとびつくりしてとび起きて言った。「王珣に望む所なり」と。王珣はかくして出向いて、行く手を立ちふさがれても進んで哭礼し、激しく身もだえして泣いた。そして喪主の謝琰の手もとらずに退出した。

そして、獻之の最後が次に記されている。兄の王徽之と獻之は同時に重態に陥り、獻之の方が先に亡くなった。獻之は生前琴が好きだった。徽之は奥に入り祭壇に腰をおろし、獻之の琴をとって爪弾いた。しかし、弦の音がとのわなかったので、床に投げつけて言った。「獻之よ、人も琴もともに失われてしまった。」と。そして、身もだえして泣き、氣を失っていた。その後一ヶ月余りで彼も死んだ。獻之の死については父の羲之のようにその原因などは不明である。一体何が原因でこの世を去ったのか、「世説」には記されていない。簡傲第二十四には二話ある。獻之兄弟はおじの郗愔に会うときには靴をはいて挨拶し、甥としての礼を十分に尽くした。ところが郗愔の子の郗超が亡くなると皆高下駄をつっかけて、態度が傲慢になった。坐を命じて、暇がないと言って帰っていった。郗愔は嘆かわしげに「郗超さえ生きていれば、青二才（鼠輩）どもがあんな態度はできないだろうに」と。獻之はいざとなると傲慢で大胆な所がある。

獻之は顧辟疆が名園をもっていると聞いて、主人とは面識はなかったが、直接その家へ庭を見に訪ねて行った。丁度、その家では友人たちを招いて酒盛りの真つ最中であつた。しかし、獻之は堂々と庭を見て歩き、よしあしを指摘し、傍若無人そのものであつた。主人はついに怒つて、「主人に対し傲慢なのは礼にはずれている。身分が高いからといって驕るのは道にそむいている。この二つを失つた者は人間ではない。」と言つて獻之の従者を門外に出した。獻之はひとり輿の中に居たが従者が来ないで、門の外に送り出されたが、別に氣にかける様子もなく楽しげであつた。これは実に失礼な、傍若無人な獻之の一面がよく出ている。

忿狷第三十一には唯一のエピソードがあり、これが最後になる。獻之が謝安を訪ねたとき、先客が席に居た。一緒に同じ長椅子に腰かけることになったが、獻之はぐすぐずしてなかなか腰をおろさなかつた。謝安は手を引いて坐らせた。そして獻之が帰ってから謝安は甥の子の謝朗に言った。「獻之は実に潔癖に生きている男だ。だが、あんなに尊大にかまえていてはせっかくの飾りけのない自然な性格を損ねてしまうと人々は言っている。」と。

獻之は自分に正直で曲つたことは好まず、率直で、大胆で、そして尊大で傲慢な所がある。とかく誤解される面もあるが、自分の氣持に逆らわず、自分を曲げることもせず、思い込んだら大胆に思った通りやり通してしまうという性格である。慨して才氣あふれ、自信のある人に多いタイプであろう。自分を飾つていつわることが大嫌いなのであろう。その点では謝安が言っているように潔癖なのである。

「世説」の各小話は、実に生々しく人間を描いている。王羲之・王獻之父子(二王)のエピソードも然りであるが、本稿は枚数制限の関係で劉孝標の注に触れられなかった。ただ、二王に関する逸話を篇を追って羅列し、所感を述べたに過ぎない。しかし、精読を通して「世説」に於ける二王の対人関係、位置、歴史上での存在感、そして人間性などが追求でき、それらを背景にして二王の筆蹟を見直すことが、本来の書作品研究の姿である。

本稿をまとめるに当り、特に次の文献書籍を多く参照させて頂いた。ここに記して謝意を標したい。

- |               |           |       |
|---------------|-----------|-------|
| 世説新語(上・中・下)   | 目加田 誠 著   | 明治書院  |
| 世説新語(上・下)     | 竹田 晃 訳    | 学習研究社 |
| 世説新語          | 森 三樹三郎 訳  | 平凡社   |
| 世説新語と六朝文学     | 大矢根 文次郎 著 | 早大出版部 |
| 晋 書           |           | 中華書局  |
| 隋 書           |           | 中華書局  |
| 王羲之           | 吉川 忠夫 著   | 清水書院  |
| 中国人の機智        | 井波 律子 著   | 中公新書  |
| 書道芸術(王羲之・王獻之) |           | 中央公論社 |
| 書道全集          |           | 平凡社   |

(本学専任講師)